

Jūn zǐ bù yōu bú jù  
君 子 不 忧 不 懼

君子は憂えず懼れず

桜美林大学名誉教授/孔子学院講師 植田渥雄



ある時、弟子の司馬牛が孔子に、君子について訊ねました。孔子は次のように答えています。「君子不忧不懼 (Jūn zǐ bù yōu bú jù) (君子は憂えず懼れず) <顔淵第十二>。君子はクヨクヨしたりビクビクしたりしないものだ、と。これを聞いた司馬牛は、その言葉の意味がよく理解できなかつたらしく、更に訊き返しています。「不忧不懼、斯谓之君子已乎? (Bù yōu bú jù, sī wèi zhī jūn zǐ yǐ hū?) (憂えず懼れず、斯れ之を君子と謂うか)。クヨクヨしない、ビクビクしない、それだけで君子なのですか、と。これに対して孔子は「内省不疚夫何忧何懼! (Nèi xǐng bú jiù fú hé yōu hé jù!) (内に省みて疚しからざれば、夫れ何をか憂え何をか懼れん)。自分の胸に手を当てて考えてみて、疚しいところがなければ、何もクヨクヨしたりビクビクしたりすることはないではないか、と。

君子の定義については、『論語』のあらゆるところで語られていますが、それらを総合すれば、指導者としての人格を備えた人ということになります。「君子は器ならず」「君子は和して同ぜず」と言うのもその一例です。しかし司馬牛に対しては、そのような言い方はしていない。ただ「君子は憂えず懼れず」と説いているだけです。もの足りなく思った司馬牛が、「それだけで君子なのですか」と訊き返したのも当然と言えば当然でしょう。

またある時、司馬牛は仁について、やはり孔子に訊ねています。すると孔子は次のように答えます。「仁者其言也訥 (Rén zhě qí yán yě nèn) (仁者は其の言や訥なり) <顔淵第十二>。仁者はとかく口が重くなるものだ、と。訥には「口が重い」

という意味があります。ここでも司馬牛は「其言也訥、斯谓之仁已乎? (Qí yán yě nèn, sī wèi zhī rén yǐ hū?) (その言や訥、斯れ之を仁と謂うか)。口が重い、ただそれだけで仁ですか、と問い返しています。孔子の答えはこうでした。「为之难、言之得无訥乎 (Wéi zhī nán, yán zhī dé wú nèn hū!) (これを為すこと難し。之を言うこと訥無きを得んや)。仁の心を実行に移すことは容易でない。だから仁者の口が重くなるのも当然ではないか、と。

此の二件のやり取りから、孔子の真意らしきものを読み取ることができそうです。

司馬牛は『論語』に三回登場しています。これで見ると、真面目ではあるが、必ずしも優秀な人物とは言えない。そればかりか、臆病で愚痴っぽく、おまけに口が軽い。指導者としては不適格としか言いようがない。このような弟子に対して、君子の道、仁の心をどう説くか。訊かれた以上は答えないわけにはいかない。顔回や冉雍に説いたようなハイレベルな論法は通用しそうにない。かといって、自分で考えろと言って突き放すのも、司馬牛の性格から考えれば効果的とは思えない。そこで思いついたのは、自分の正しさに自信を持たせること。言葉の重みを自覚させること。この二点であったようです。これだけでは君子の道、仁の心にほど遠いかも知れないが、少なくとも司馬牛にとってはその第一歩になり得ると、孔子は判断したのでしょう。ここに孔子の心の温かさ、愛弟子への配慮の周到さを感じ取ることができます。

(わりい「中国語で読む漢詩の会」講師)